

研究結果説明書

1. 事業の実施期間

令和5年4月1日 ～ 令和6年3月31日

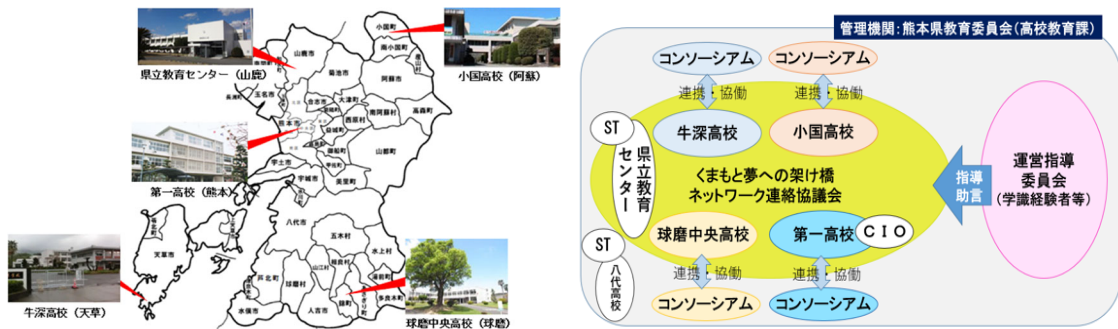
2. COREネットワークの構成

(1) COREネットワークの名称：くまもと夢への架け橋ネットワーク構想

(2) COREネットワークを構成する高等学校等

- ①熊本県立第一高等学校（配信校）
- ②熊本県立小国高等学校（受信校）
- ③熊本県立牛深高等学校（配信校・受信校）
- ④熊本県立球磨中央高等学校（配信校・受信校）
- ⑤熊本県立教育センター（配信校）

※ネットワーク構成校外でスーパーティーチャー所属の熊本県立八代高等学校からも配信



3. 調査研究結果の概要

(1) 「教科・科目充実型」の遠隔授業などICTも活用した連携・協働の取組

(受信教室における体制の在り方に関する取組を含む。)

昨年度に続き、教員としての経験年数や経験勤務校に因らない遠隔授業体制整備の可能性を実証するとともに、教育委員会及び構成校を繋げたクラウドによるデータ共有や連絡協議会等によるネットワーク構成校等との密な連絡や協議を実施し、遠隔授業を行う運営体制を強化した。

また、本県の特徴でもある配信校と受信校の合同授業や教育センターから配信のみを行う授業等の複数パターンの実施を継続しつつ、令和5年度は実技を伴う科目や探究学習的性格を持つ学校設定科目を開講し、教科・科目における遠隔での実施の可否の検証や、スーパーティーチャー（指導教諭、以下、「ST」という）を活用した難関大学向けの科目を開講することによる生徒及び受信校側の立会い者への影響についても研究した。

今年度、新たに3科目を増設したため、昨年度から実施している授業担当者会において、授業づくりや生徒の見取り・評価についての情報共有の意義は大きくなり、新たに授業を担当した教諭の遠隔授業における授業力の向上や遠隔授業そのものの普及という視点からも、今後における授業担当者会の必要性を改めて実感した。

今年度も遠隔授業を受けた生徒の評価は比較的高く、ネットワーク構成校間におけ

る生徒の目標の共有と切磋琢磨し合う授業での肯定的雰囲気生まれた。また、受信側の立会い者においても、配信側の授業者から学ぶことは多く、立会い者としての役割の技術（生徒のフォローアップ等の改善）の向上も確認することができた。

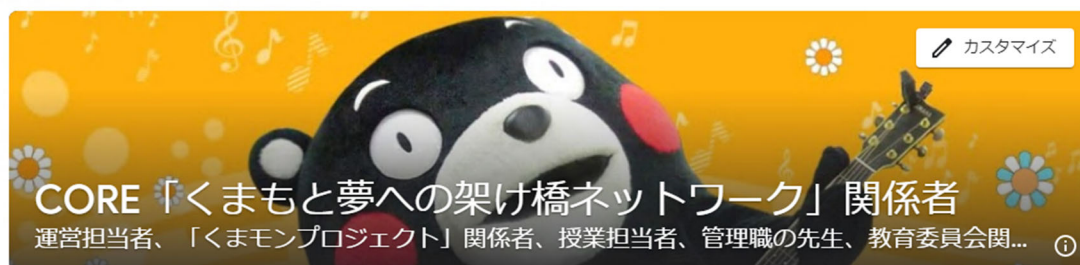
(2) 学校間連携を行うための運営体制に関する取組

管理機関である教育委員会（高校教育課）とネットワーク構成校が更に一体となって研究開発が実施できるよう運営体制を次の図のように整理・再構築した。

令和4年度の運営体制の違いは、配信側にネットワーク構成校外のSTから1科目授業を配信したところにある。受信校の同教科の先生の学びの機会の創出という目的及び高い教科指導力による受講する生徒の学力向上が大きく期待できたことから、STに依頼し、遠隔授業を実施した。

また、昨年度に引き続き、くまもと夢への架け橋ネットワーク連絡協議会、各校コンソーシアムや運営指導委員会を設置するとともに、遠隔授業コーディネーター(CIO)を任用し、第一高校に継続配置した。連絡協議会は年度初めに対面で実施し、事業目的の再確認と昨年度の取組の振り返り等を行い、教育課程等の共通化、遠隔授業の実施と評価、探究的な学びについて協議を行い、各構成校の情報を共有した。また、昨年度未実施に終わった地域課題解決に向けた探究的な学び(くまモンプロジェクト)における学校を超えた共同研究について教育委員会から提案した。

その後の連絡等については年間を通じて、昨年度作成したくまもと夢への架け橋ネットワークに係る担当者の Classroom を活用することにより、関係者の負担軽減を図った。

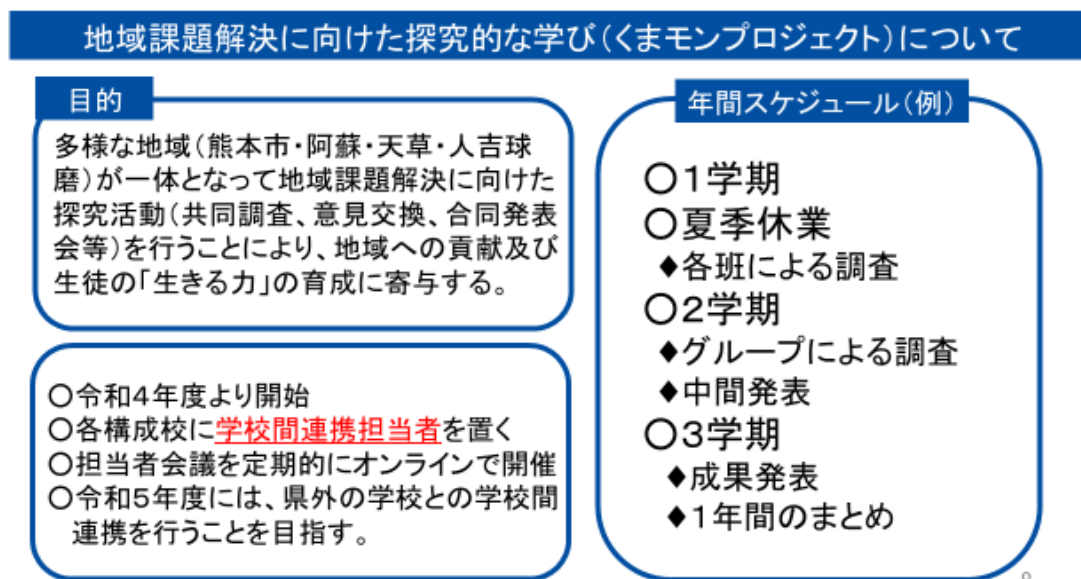


(3) 市町村、高等教育機関、産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、学校外の

教育資源を活用した探究的な学びなどによる教育の高度化・多様化に関する取組

探究的な学びにおけるテーマの設定については、各校様々であるが、本事業では、構成校からそれぞれ2グループを地域課題解決に向けた探究的な学び(くまモンプロジェクト)に参加してもらうこととして、令和4年度から、各校の取組みをオンラインで発表し合い、探究的な学びの事例や研究手法の共有を行ってきた。

(当初のプロジェクト構想図)



8

4. 調査研究の実績

(1) 実施日程

月	実施内容
令和5年 4月	C I Oの任用(任用通知書の手交) 第1回実証地域連絡協議会
5月	第1回くまもと夢への架け橋ネットワーク連絡協議会 地域への説明会の開催(各学校)
6月	小国高校における「声楽」の授業訪問 各高等学校コンソーシアム委員への依頼・委嘱 各高等学校コンソーシアム会議(学校運営協議会) 運営指導委員への依頼・委嘱
7月	—
8月	第2回実証地域連絡協議会
9月	牛深高校における「総合的な探究の時間」の授業訪問
10月	内田洋行・運営指導委員による訪問調査(第一高校) 各高等学校コンソーシアム会議(学校運営協議会)
11月	遠隔授業 授業担当者会 第3回実証地域連絡会議 内田洋行による地域協働・コンソーシアムヒアリング調査
12月	「くまモンプロジェクト」生徒中間発表会

	第1回運営指導委員会 熊本スーパーハイスクール（KSH）全体発表会「県立高校学びの祭典」 CIO面談
1月	成果発表会
2月	令和6年度遠隔授業に関するヒアリング
3月	「くまモンプロジェクト」生徒成果発表会 各高等学校コンソーシアム会議（学校運営協議会） 報告書刊行

※学校における調査研究の実績のほか、コンソーシアムの活動等についても記入すること。

※遠隔授業システムを活用した教育課程外の取組については、アンダーラインを付すこと。

（2）調査研究実績の説明

①「教科・科目充実型」の遠隔授業などICTも活用した連携・協働の取組

（受信教室における体制の在り方に関する取組を含む。）

○令和5年度の実施科目について【概要】

（ア）数学B

小国高校において、習熟度別指導を展開する中で、難関大学進学志望者を対象に開設。第一高校から配信。配信側の第一高校にも生徒がおり、本県における遠隔授業の中でも最大規模の合同方授業。令和4年度から2年間実施。

（イ）実践文系数学

小国高校において、習熟度別指導を展開する中で、難関大学進学志望者を対象に開設。第一高校から配信。配信側の第一高校にも生徒がおり、本県における遠隔授業の中でも最大規模の合同方授業。令和4年度から2年間実施。

（ウ）声楽

専門性の高い指導の実施及び実技を伴う科目の遠隔授業における可能性を探るために牛深高校から小国高校へ向けて配信した。受講生徒の人数は少ないが、配信側にも生徒がおり、小規模であるが合同型授業である。音声のタイムラグや評価の方法について試行錯誤が必要だった。令和5年度に実施。

（エ）マーケティング

小国高校のある小国町は県内屈指の温泉所でもあり、生徒の中にも旅館を営んでいる親を持つ者もおり、経営に興味・関心を持つ生徒のニーズに応じる形で実施。小国高校には商業の専門教師がいないため、免許外教科担任制度の解消という側面での選定でもあった。令和4年度から2年間実施。

（オ）グローバル・スタディーズ

配信校の球磨中央高校のある人吉球磨地域も受信校である牛深高校のある天草市も県内において人口の減少幅が大きく少子高齢化等の課題を抱える地域である。類似する課題を抱えた地域の生徒たちが、遠隔授業を介してお互いの地域を理解するとともに、互いに抱える課題を「熊本県としての課題」として幅広く捉え、課題解決に向けた取組みを行う科目として実施。令和5年度に実施。

（カ）異文化理解

生徒はプレゼンテーションによる意見発表等に取り組み、STによる専門的な知見からダイレクトな助言・アドバイス等が期待できる科目。また、受信校の立会者が専門（外国語）であったことから、教員の教科専門性及び資質・能力の向上を期待

して開講。令和4年度から2年間実施。

(キ) 発展英語

難関大学進学志望者に向けた、STによる発展系の科目。受信側の生徒のニーズに合わせるため、高い専門性を持つSTに授業を依頼した。本県のネットワーク構成校以外の学校から、受信側にのみ生徒がいる状態で配信したが、立会者は専門教師であり、教員の教科専門性及び資質・能力の向上も期待して開講した。令和5年に実施。

令和5年度は、新たに声楽、グローバル・スタディーズ（公民：学校設定科目）及び発展英語の3科目を開講した。開講した科目について比較し下図のとおりまとめた。

熊本県における遠隔授業の比較(まとめ)

形態	双方向(合同型授業)				一方向(受信校のみ生徒がいる場合)		
科目(教科)	数学B(数学)	実践文系数学(数学)	マーケティング(商業)	声楽(音楽)	グローバル・スタディーズ(公民)	異文化理解(外国語)	発展英語(外国語)
受講人数(配信/受信)	33/2	33/2	31/5	2/1	34/4	0/27	0/2
受信側の立会者	教員(専門)	教員(専門)	教員(公民科)	教員(理科)	教員(理科)	教員(専門)	教員(専門)
遠隔授業の適不適	○	○	○	×	△	△	△
対面授業(最低年2回実施)	学期に1回が適切。	学期に1回が適切。	現状の年2回で良い。	多ければ多いほどよい。 ※RSは年3回実施(それでも少ない)	多ければ多いほどよい。	学期に2回ずつが理想(行けるだけ行きたい。成果発表の際は特に)	学期に1回が限界(移動距離の問題)
成果	【生徒】 ・大学進学という目標を共有でき、お互いのモチベーションが上がった。	【生徒】 ・大学進学という目標を共有でき、お互いのモチベーションが上がった。 【先生】 ・教え方の研鑽ができた。 ・問題に対する新しいアプローチの発見。	【生徒】 ・受信校側の生徒が、マーケティングの授業を受け、進学の進路決定の材料となった。 ・受信校側の家業(旅館)を継ぎたい生徒が商業経済検定2級に合格。	【生徒・先生】 ・受講したい生徒に対し、希望科目を開講できた。	【生徒】 ・お互いの地域課題を共有することができ、それぞれについて意見交換をしたり、課題を比較することができた。	【先生】 ・指導教諭とのTTを通して、生徒をやる気にする導入方法や教え方について学ぶことができた。	【先生】 ・効果の有無については今後の検証が必要だが、授業の手応えとしては効果を感じた。特に外部検定を想定した写真や絵の口頭描写等にICTは効果的。
課題	【先生】 ・見取りの際、画面越しの確認はできているが、直接的なやり取りの中ではできないため、本校(配信側)の見取りと比較すると不十分。	【先生】 ・見取りの際、画面越しの確認はできているが、直接的なやり取りの中ではできないため、本校(配信側)の見取りと比較すると不十分。	【先生】 ・受信校側の生徒の見取りについては、どうしても受信校の担当者任せになってしまう。	【先生】 ・実際の発声の際、音、表現を正確に聞き取れず、適切な評価が難しい。 ・歌わせながらの指導ができず、指導中に何度も伴奏を止めなければならぬ。	【先生・生徒】 ・見取り後の指導は生徒との関係性がなため行いにくい。 ・作業中に個別のコメントを送っても気づかない生徒が多く双方のやり取りが難しい。	【先生】 ・学習内容の性質上ペアワーク、グループワークを取り入れたいが、画面ではほぼ見取りができない。 ・(授業者が)学習効果を感じにくい。	【先生】 ・機材不足のため、音声が届き取れないことがある。 ・進学者向けのため、紙ベースでの作業も多いことから立会者の協力なしには成立しない。

声楽や探究的な学びの性格を持つグローバル・スタディーズについては、実技指導や作業過程の観察等を行うため、対面で行う方が指導も評価も行いやすく、また、外国語科目である異文化理解及び発展英語についても、スピーキングという実技が伴うため、授業者は指導や評価に苦慮したようである。



授業見学や授業担当者会における授業者の発言や感想等を基に、それぞれの科目における遠隔授業の適不適についても考察してみたが、声楽については課題が多く、また、改善を図る場合においても、指導者の努力だけでは限界があり、新しい機材の導入等

が必要と思われるため、それなりの予算が必要であるため、不適と判断した。残る3科目については、授業者の工夫や少額の機材投資により比較的短期間で改善は図ることができそうであると判断したため、引き続き授業者に工夫・改善を求めていきたい。

現段階で既に遠隔授業に適していると判断できる本県で実施している科目は、数学B、実践文系数学、マーケティングの3科目である。科実技を伴わず、配信のみでも成立するという科目の性質が前提に加え、授業者の授業に対する熱量や力量が少なからずとも影響していると分析している。また、特に数学の2科目については、受信校の立会い者も同じ専門教科の先生で



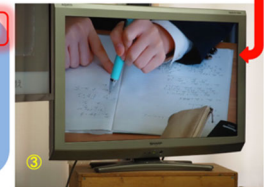
R5 遠隔授業の様子(数学B)
授業者:第一高校 辻 正利 教諭



配信校(第一高校):33人
受信校(小国高校):2人



- ①受信校の生徒が自分の解答を解説
- ②授業者が配信校の生徒の解答を補足
- ③授業者は配信校の生徒の問題に対するアプローチを、手元をアップして見取することも

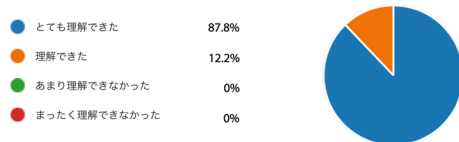


あるが、受信校の実情（生徒の進路希望は多様化しており、その一部は大学進学であるが、小規模校であるため開設できる科目に制限があること）をよく理解されていたことと、先生自身に学ぶ姿勢があり、遠隔授業の導入に前向きだったことが、これら2科目における生徒の学力向上や学びの深化に繋がったと分析している。

【生徒授業アンケート結果】

・数学B：第一高校（配信校）対象

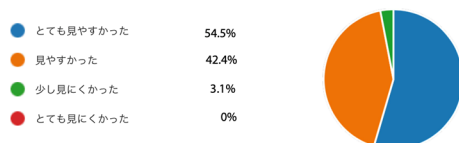
1. 授業の学習内容は理解できましたか。



3. 受信校（小国高校）の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 受信校（小国高校）の生徒の映像は見やすかったですか。

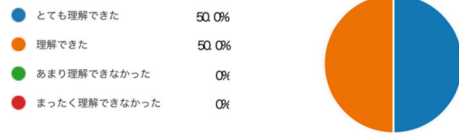


4. 授業で改善してほしいことはありますか。

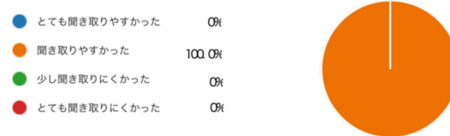


・ 数学 B：小国高校（受信校）対象

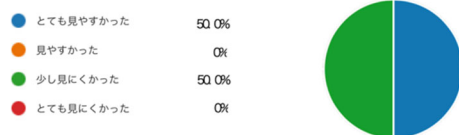
1. 授業の学習内容は理解できましたか。



3. 授業の音声や配信校（第一高校）の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 授業の映像や配信校（第一高校）の生徒の映像は見やすかったですか。

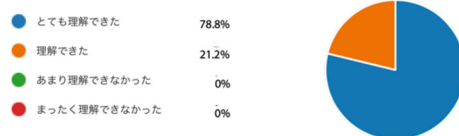


4. 授業で改善してほしいことはありますか。

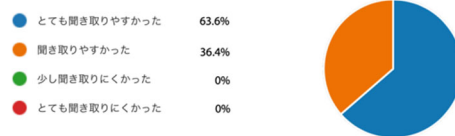


・ 実践文系数学：第一高校（配信校）対象

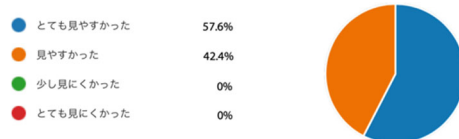
1. 授業の学習内容は理解できましたか。



3. 受信校（小国高校）の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 受信校（小国高校）の生徒の映像は見やすかったですか。

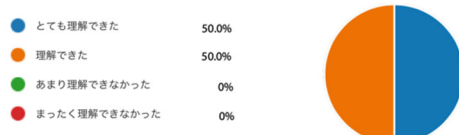


4. 授業で改善してほしいことはありますか。

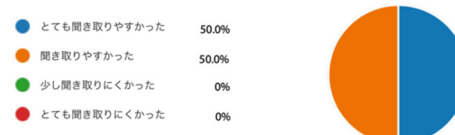


・ 実践文系数学：小国高校（受信校）対象

1. 授業の学習内容は理解できましたか。



3. 授業の音声や配信校（第一高校）の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 授業の映像や配信校（第一高校）の生徒の映像は見やすかったですか。

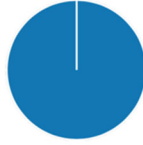
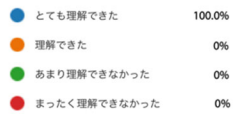


4. 授業で改善してほしいことはありますか。

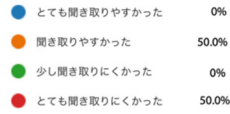


・ 声楽：牛深高校（配信校）対象

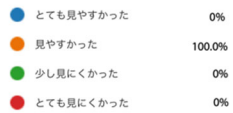
1. 授業の学習内容は理解できましたか。



3. 受信校（小国高校）の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 受信校（小国高校）の生徒の映像は見やすかったですか。

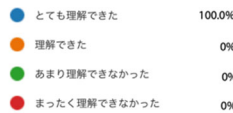


4. 授業で改善してほしいことはありますか。

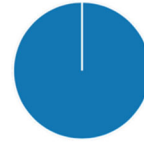
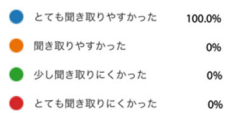


・ 声楽：小国高校（受信校）対象

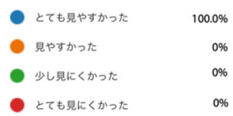
1. 授業の学習内容は理解できましたか。



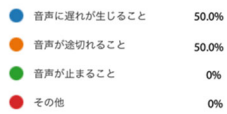
3. 授業の音声や配信校（牛深高校）の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 授業の映像や配信校（牛深高校）の生徒の映像は見やすかったですか。



4. 声楽の授業を受講して気になったことは何ですか。

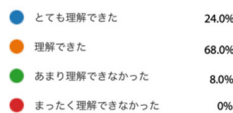


6. 授業で改善してほしいことはありますか。

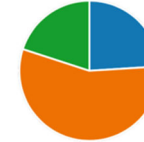
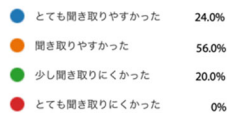


・ マーケティング：球磨中央高校（配信校）対象

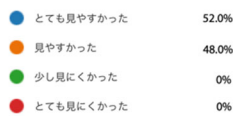
1. 授業の学習内容は理解できましたか。



3. 受信校（小国高校）の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 受信校（小国高校）の生徒の映像は見やすかったですか。



4. 授業で改善してほしいことはありますか。

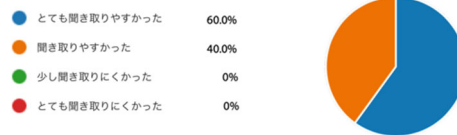


・マーケティング：小国高校（受信校）対象

1. 授業の学習内容は理解できましたか。



3. 授業の音声や配信校（球磨中央高校）の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 授業の映像や配信校（球磨中央高校）の生徒の映像は見やすかったですか。



4. 授業で改善してほしいことはありますか。

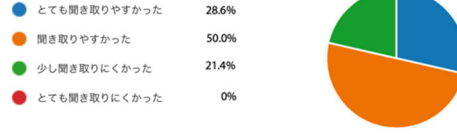


・グローバル・スタディーズ：球磨中央高校（配信校）対象

1. 授業の学習内容は理解できましたか。



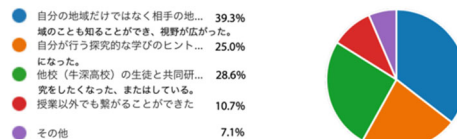
3. 受信校（牛深高校）の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 受信校（牛深高校）の生徒の映像は見やすかったですか。



4. グローバル・スタディーズを他校（牛深高校）の生徒と一緒に受講してどうでしたか。

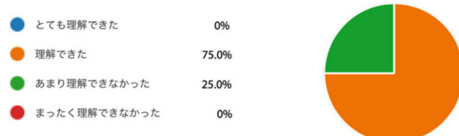


6. 授業で改善してほしいことはありますか。

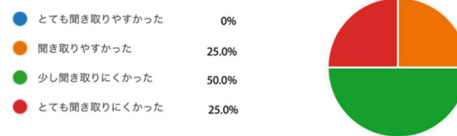


・グローバル・スタディーズ：牛深高校（受信校）対象

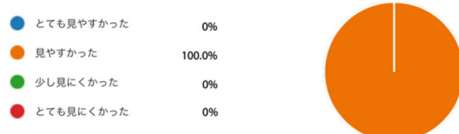
1. 授業の学習内容は理解できましたか。



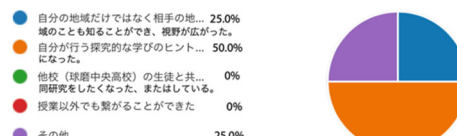
3. 授業の音声や配信校（球磨中央高校）の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 授業の映像や配信校（球磨中央高校）の生徒の映像は見やすかったですか。



4. グローバル・スタディーズを他校（球磨中央高校）の生徒と一緒に受講してどうでしたか。

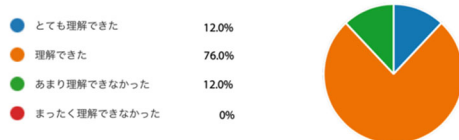


6. 授業で改善してほしいことはありますか。

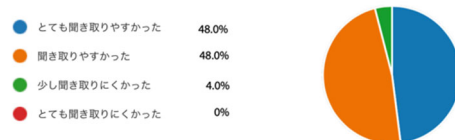


・異文化理解：球磨中央高校対象

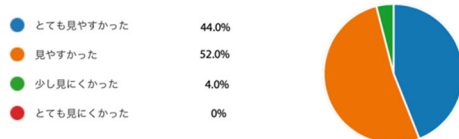
1. 授業の学習内容は理解できましたか。



3. 授業の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 授業の映像は見やすかったですか。

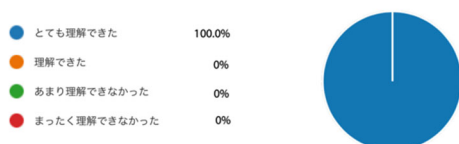


4. 授業で改善してほしいことはありますか。

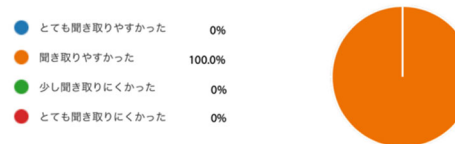


・発展英語：小国高校対象

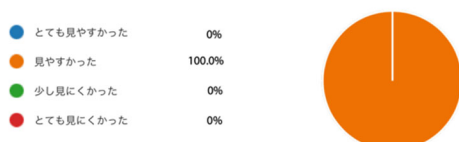
1. 授業の学習内容は理解できましたか。



3. 授業の音声は聞き取りやすかったですか。



2. 授業の映像は見やすかったですか。



4. 授業で改善してほしいことはありますか。



【考察】

生徒の「学習内容理解」については、全ての科目において概ね「とても理解できた」「理解できた」という回答が占めた。特に、実施2年目の科目についてはそれが顕著であった。一方、実施1年目の科目は、学習内容理解度にばらつきがあるが、受講生徒が少ない場合、授業者が寄り添った形で丁寧な授業の実施が可能であるため、実施1年目であっても生徒は内容をよく理解できている（声楽）。しかし、受講生徒数が多い上、教える内容量が多くなると、特に、受信側に「あまり理解できなかった」と回答する生徒が多く見られた（グローバル・スタディーズ）。

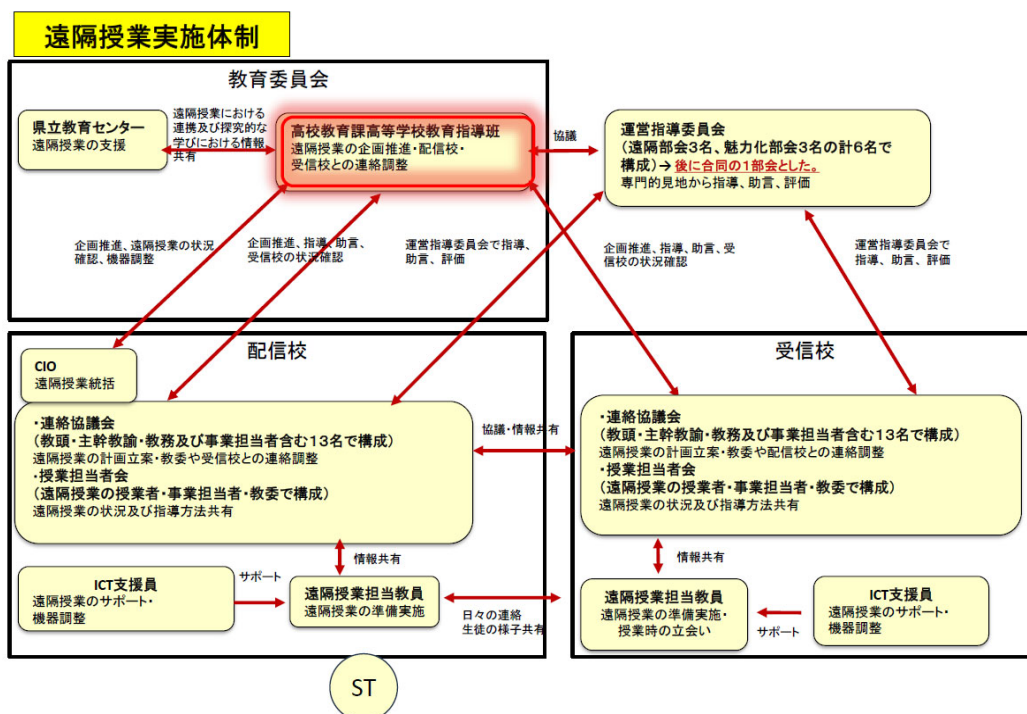
また、実施2年目のため映像や音声については特に問題ないと思っていたが、実施1年目の科目については、映像や音声について、「少し見にくかった」「少し聞き取りにくかった」「とても聞き取りにくかった」という回答が見受けられ、配信する科目の性質に合わせた機器整備を行う必要があると感じた。また、音声については、配信側・受信側双方に「少し聞き取りにくかった」「聞き取りにくかった」と回答している生徒がいることから、対面で行う授業よりも聴力の個人差が関係するのではないかと考える。

最後に、他校の生徒と同じ授業を受けることは、切磋琢磨できる環境の創出や協働する姿勢を産み、多くの生徒が肯定的に受け止めていることがわかった。このプラスの環境をどのように継続していくか（生徒が飽きないか）について、授業者には定期的な振り返りと改善が求められる。

②学校間連携を行うための運営体制に関する取組

基本的には下図のとおり、令和4年度を踏襲する形の運営体制で本事業に取り組んだが、令和5年度に新たに開設した発展英語の授業者にネットワーク構成校以外のSTを活用した。STは高い授業力を有するため、小規模校における大学進学者向けの授業を確実にこなせること、そして、STの授業を受信校の同教科の先生方が見ること、先生方の学びの場を創出できることがその大きな理由である。当該授業を受講した小規模校の生徒2名は、それぞれ自分の希望する国公立大学に合格することができた。

学校間連携で課題として残ったことは、それぞれの学校における行事や突発的な日課の変更による授業変更の連絡が、授業者の負担となっていることである。教務主任同士が日程の調整を行っている学校もあるが、小規模校の場合、教員の数も少ないため、授業者同士、授業者と教務主任という連絡体制も残っており、県全体として整理できなかったことは反省点であり、今後、連絡協議会等で議題として取り上げ、次年度以降に改善を図っていきたい。

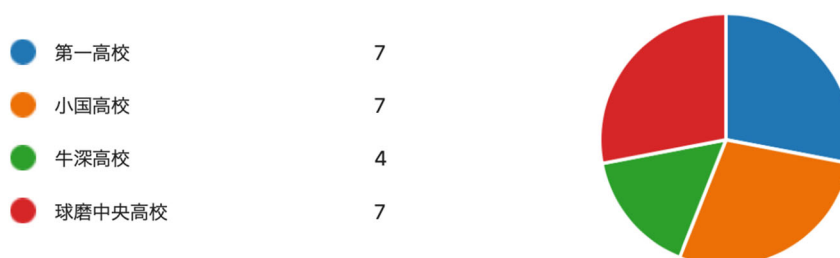


③市町村、高等教育機関、産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、学校外の教育資源を活用した探究的な学びなどによる教育の高度化・多様化に関する取組

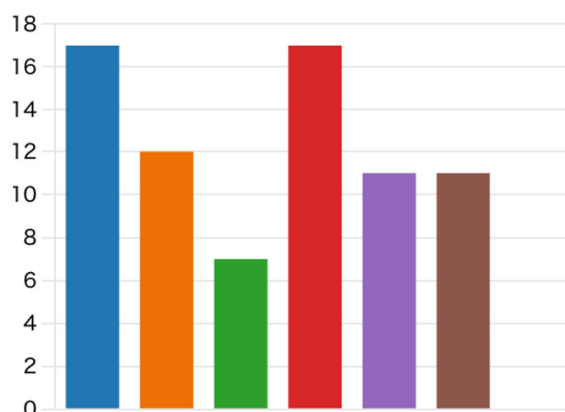
探究的な学びにおけるテーマの設定については、各校様々であるが、本事業では、構

成校からそれぞれ2グループを地域課題解決に向けた探究的な学び（くまモンプロジェクト）に参加してもらうこととして、令和4年度から、各校の取組みをオンラインで発表し合い、探究的な学びの事例や研究手法の共有を行ってきた。調査に必要なアンケートを実施する際にも、ネットワーク構成校間で自分の地域以外の意見を容易に尋ねることができるなど、このプロジェクトの意義は大きかったと感じている。以下は、当該プロジェクトに参加した生徒の学びについてのアンケート結果である。

1. あなたの所属校について教えてください。



2. あなたが「くまモンプロジェクト」における探究的な学びを通して、身についたと思う力や態度について教えてください。（複数回答可）



3. 身についた力や態度（その他）

- ・ 課題から地域の方が楽しめるものを考え、実践する力や、創造する力
- ・ 以前より視野が広がったと感じた。

- ・情報収集・分析に加え、それを言語化する力
- ・情報収集・分析から次の課題へと繋げる力
- ・物事を多視点から見て考える力
- ・研究に取り組んだことによって今までの学習で勉強できなかったことや人の関わりを学べて実行に移す力が身についた。

4. 関わった地域住民（大人）の変容

- ・自分たちが企画したことについて、興味を示していただけたり、積極的に参加していただけるようになった。
- ・地域に関しての関心や興味がより一層出てきたように感じた。
- ・地域の方は私たちに関して積極的に関わってくれたと思う。私たちが興味を示せばより詳しく教えてくださった。
- ・どんな意見も前向きに考えてくれた。
- ・【自由になった】私たちが提案するものの中には大人の考えていなかったものがあるらしく、はじめは驚かれたり、止められたりしていたが、今では新しい発想と一緒に煮詰めてくださるようになった。

5. プロジェクトに参加して、自分にとっての成果と課題

- ・災害復興支援商品を企画し販売まですることができた。もっと流通チャネルを広げたい。
- ・地域の見方が変わった。どうしたら人から見ていただけるかということをもみんなと協力して話し合うことができた。
- ・課題を見つけ、考え、行動することを一人ではなくプロジェクトに参加している仲間たちと共に行うことで新たな考えや価値観を知ることができ、視野が広がることにつながった。課題としては、1年間という期間を見通して今、どういったことをすべきなのかを明確にしておけば継続的かつ効果的な活動ができたのではないかと感じた。
- ・課題を発見する力や解決をするためにどんなことをすればいいか、どうすればもっと良くすることができるかを自分たちで考えたり、他校とオンラインミーティングなどを通していろんな視点からのアドバイスをもらっていい刺激になった
- ・成果としては地域の課題に関して触れながらも人を楽しませるようなものを作れたと思う。また、自分自身の成長点になったと思う。課題としては、もっと情報を収集すべきだったと感じた。他校の発表を見ると、時間をかけて念入りに調べ根拠を立てていたのも、もっと情報を集めること、そしてアグレッシブに行動しなければならぬと感じた。
- ・（前略）それを重ねていく中で課題を発見・解決する力、情報を収集・分析・言語化する力、当たり前だと思っていたことを考え直す力、一つの物事を参加者として

だけでなくプランナーとしてなど多方面の視点を持って考える力などを得ることができた。私はこのプロジェクトに参加し、活動したことを誇りに思う。




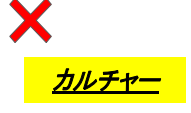

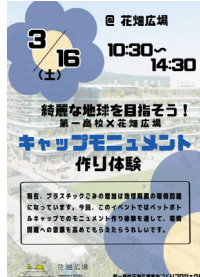
- ・課題は自己完結してしまいがちなこと、計画を立ててそれが外れた時の修正能力が不十分なことの2点である。

結果から窺えることは、地域の課題を発見する力、情報を収集する力、プレゼン・発表力等については、生徒自身も力が付いたと感じている一方、情報を分析する力については自己評価が低く、探究的な学びにおける今後の課題として、ネットワーク構成校に留まらず、全ての県立高校に指導方法の改善をお願いしていく。「第46回18歳意識調査一国や社会に対する意識(6カ国調査)」(2022年3月24日日本財団まとめ)において、「自身と社会の関りについて」における、「自分は責任がある社会の一員だと思う」「自分の行動で国や社会を変えられると思う」「国や社会に役立つことをしたいと思う」「ボランティア活動に参加したい」等の項目で軒並み最下位であった日本であるが、当該プロジェクト参加者の回答では、他人と協働する力や地域社会に参画しようとする態度が身に付いたと感じている生徒が半数近くいたことから、一定の効果があったものと分析している。今後は探究的な学びが、どのように生徒自身と社会の関りに影響を与えていくのかについて、更に深く研究していきたい。

【各校における主なプロジェクト内容】

・熊本県立第一高校における「花畑広場まちづくりプロジェクト」

熊本市役所市街地整備課と協働し、生徒会を中心に若者世代をターゲットとした市街地の中心に位置する「花畑広場」のイメージ向上を図り、日常的な賑わいの創出を図った。日常的な賑わいの創出には、2年生の希望者30名程度が毎月ワークショップを行った。

これからの取り組みについて		これからの取り組みについて	
<p>タッグ企画</p> 	<p>イベント企画</p> 	<p>プレイスメイキング</p> 	<p>カルチャー</p> 
<p>U36 de Night Time ～映画で“楽しい”自販機夜～ 3/21(木) 日没時間～ @ 花畑広場</p> 	<p><企画概要></p> <ul style="list-style-type: none"> □ 環境を考える紙芝居 □ ペットボトルキャップの再利用 □ 作ったキャップにお絵かき □ フォトスポット 	<p>3/16 (土) 10:30～14:30 @ 花畑広場 綺麗な地球を目指そう! 第一高校X花畑広場 キャップコミュニティ 作り体験</p> 	

花畑プロジェクトとは

プレイスメイキング × カルチャー × プロモーション

市役所市街地整備課の方との
月に1度のワークショップ



**なまつりダヨ！全員集合！
～花畑広場ピクニック～**

日程 3月3日(日)
12:00～15:00

場所 花畑広場・広場周辺
(レジャーシート・ベンチあり)

お願い ①飲食物は持参してください。
②おたたくさん写真を撮ってください！
③お申込に、お花畑広場ピクニックをつけて
ぜひ投稿してください！
④これからも花畑広場をご活用ください！

・熊本県立小国高校における小国杉の端材を活用した灯籠制作（熊本県立牛深高校との協働研究）

夏休み期間中のフィールドワークで地元の製材所を訪問。小国杉の特徴などを学ぶうちに、地元の名産である小国杉の端材（ちくわ）が捨てられていることを知り、活用方法を研究した。総合的な探究の時間における牛深高校とのミーティングを通し、牛深高校がイルミネーションイベントに灯籠を作成し会場を装飾する予定であることを知り、小国杉の端材を活用してもらうことを提案。製作段階においても、牛深高校の生徒が小国町の製材所に質問や相談を行った。イベント当日には小国高校の生徒作品も遠く離れた牛深の町に飾ることができた。

研究の背景

SDGs講話を受けて
環境に配慮した活動を行いたい

端材になった小国杉を有効活用したい

探究の流れ

- 4,5月 有識者講話(SDGs含む)
- 6月 テーマ決め
- 7月 オンライン探究①
- 8月 フィールドワーク
オンライン探究②
- 9月 中間報告
- 10月～制作活動
- 11月 オンライン探究③
- 12月 CORE中間報告会、KSH発表会
- 1月 オンライン探究④
- 2月 校内尚志発表会
- 3月 CORE最終発表会

ちくわ灯籠の製作について(10月～)

①ちくわを灯籠にどうやってするかを考えたい

②製材所関係の方に道具の使い方や加工の仕方についてアドバイスをもらった

③インパクトを使っていろんな模様を彫った

④割れた部分の補修とフィルムつけの際には、ボンドを使用した

⑤ヤスリで表面をきれいにした

⑥ニスを書いて木の色をよくしたり、腐らないようにした

中間発表前の取組Ⅱ

KSH発表会(12月)、校内尚志発表会、尚志『ジブンゴト』レポートの作成(2月)

色んな場面で、学んだり経験したりしたことをアウトプットできた。

中間発表後の取組Ⅲ

学校を超えた共同研究：小国高校と牛深高校による共同研究

	小国高校	牛深高校
1.経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsの講演を聞き「小国杉の端材の有効活用」を探究テーマとした小国高校と課題研究において「牛深イルミネーション2023」でのシーグラスを活用したランタンの制作を考えていた牛深高校が7月にオンライン会議を実施。小国高校は牛深高校がイルミネーションイベントに牛深高校の生徒が関わっていることを知る。 ・【牛深】イルミネーションの展示場所が日本庭園であり和の雰囲気にあふれる場所であるため、木材を使用した作品を制作したと考えるようになり、小国高校に小国杉を活用できないか相談。 ・【小国】夏休みのフィールドワークで、端材のうち「ちくわ」と呼ばれるものがほとんど有効活用されていないことを知り、「ちくわ」を活用した灯笼を制作し、イルミネーションイベントに一緒に展示させてもらえないか、牛深高校に提案。 	
2.生徒がしたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・牛深高校生との意見交換 ・河津製作所(木材の提供者)へのフィールドワーク及び端材の提供に関する交渉 ・「ちくわ」を利用した灯笼の制作 	<ul style="list-style-type: none"> ・デザインの考案 ・作品の制作 ・小国高校の生徒、河津製作所との意見交換
3.先生がしたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン打合せに関する日程調整 ・牛深高校との探究テーマの情報交換 ・オンライン会議にかかる生徒へのフォロー ・材料及び作品の受け渡し 	<ul style="list-style-type: none"> ・小国高校の担当先生への提案 ・オンラインミーティング(小国高校、河津製作所)の日程調整 ・資材、作品の受け取り ・イルミネーション実行委員会への参加

4.生徒の変容

【生徒の視点】
 ・オンラインでの他校との生徒と協働し、アイデアを共有することは新鮮であり、思考の幅が広がった。
 【先生の視点】
 ・活動が積極的かつ意欲的になり、オンラインでの交流を重ねるごとに、自分たちの成果と課題を見出し、活動の方向を改善しながら取り組むようになった。



7月のオンライン会議



11月には完成した作品を小国高校へ披露

・熊本県立牛深高校におけるロゲイニングイベントの開催

4月に外部講師による「探究スタートアップ講演会」を実施し、探究学習へ向かう意欲を高める。2学年では「まちおこし」を年次全体の探究のテーマに設定。地元まちづくり協議会や地元商店が組合、市役所等から探究活動への支援や助言を受けるなど、コンソーシアム、地域との連携を強化。11月に「牛深まちあるきロゲイニング」を開催した。牛深町は県内でも過疎化が進む街の1つであるため、生徒たちは地域の活性化を望んでいる。今回、地域課題解決を提案型で終わるのではなく、実際に活動をやってみて解決していくという実行型の探究型に取り組み、参加者アンケートではイベントの開催と内容に多くの肯定的な回答を得ることができ、参加者もイベントが商店街に貢献するだけでなく、牛深の魅力再発見につながると考えていることも分かった。この企画は市などが主催した起業塾の発表会で最優秀賞に輝いた。



・熊本県立球磨中央高等学校における「球磨地域学」の実施

1学年の球磨地域学において、自治体の企画課職員による講演やワークショップを行い、地元について学び、地元の強さを生かし、外に発信していく取組を行った。球磨中央高校は母体が商業高校であるため、様々な商品開発を行っているが、学校の所在地である県南の人吉球磨地域は令和2年7月豪雨で甚大な被害を受けており、その復興に向け一過性で終わらない継続的な取組を目標とし、探究学習に取り組んだ。特に、山崎製パンと取り組んだ地元産の栗を使用したランチパックとタルトの開発・販売では、売り上げ1袋当たり1円を熊本県に寄付するなど、生徒は自分たちの行動が社会貢献に繋がれることを常に意識しながら取り組んだ。

⑦ 仕様設計 濃厚お茶チョコレート chococh

商品に同封したリーフレット お茶の種類等を説明

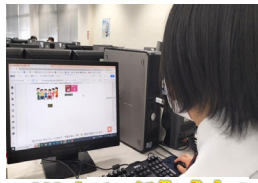


この「chococh」は、令和2年7月豪雨で被災された産地を応援したいという思いから、熊本県人吉球磨地域のお茶を原料として球磨中央高校生が企画・開発し、産地の方が動かれている「まごころ工房」で製造された商品です。

このエシカル商品を知って欲しいので、右のQRコードを読み取って、私たちが作成したサイトをご覧ください。

商品には、様々な人の「思い」が込められています。

私たちが作成した「エシカル商品」説明ページ



Webページ作成中!

⑧ 2/28 くもと産業復興フェアポ (グランメッセ熊本)



栗を使っ「ランチパックとタルト」

栗を使っ「ランチパックとタルト」

山江村 特産品「栗」

熊本県立球磨中央高等学校 熊本県立球磨中央高等学校の生徒と共同で企画した製品です。

令和2年7月豪雨からの復旧・復興に1袋あたり1円を熊本県に寄付致します。

令和2年7月豪雨からの復旧・復興に1袋あたり1円を熊本県に寄付致します。

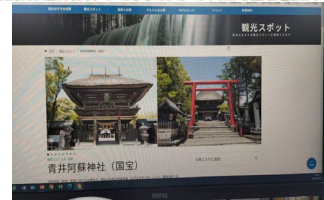
栗を使っ「ランチパックとタルト」

栗とホイップクリーム等、様々な試作品を作成



観光業の支援のため、「人吉球磨地域の観光情報」紹介ページ

私たちは熊本県球磨郡にある「球磨中央高等学校」の生徒です。令和2年7月豪雨で甚大な被害を受けた人吉球磨地域の復興に向け、一歩ずつ歩むの大切さを痛感しております。是非、ぜひ、ご活用ください。



人吉球磨地域の観光情報は「こちらから熊本県観光連盟特設サイト」

5. 遠隔授業の実施状況

受信校	教科	科目	遠隔授業を実施した授業回数（対面授業を除く。）
小国高等学校	数学	数学B	38
小国高等学校	数学	実践文系数学	54
小国高等学校	音楽	声楽	48
小国高等学校	商業	マーケティング	40
小国高等学校	外国語	発展英語	32
牛深高等学校	公民	グローバル・スタディーズ	16
球磨中央高等学校	外国語	異文化理解	24

6. 調査研究の進捗状況、成果、評価（※目標設定シート（別紙様式1 別添4）を添付）

1. 本構想において、実現する成果目標の設定（アウトカム）

（1）学びの基礎診断等により把握する生徒の学力の定着・向上の状況

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		57%	61%	65%
実績値	52.9%	55.1%	53.9%	52.5%
把握のための測定方法及び指標	第3期熊本県教育振興基本計画の数値目標に基づき、学力が向上した生徒の割合（単位：％）で算出した（「学びの基礎診断」認定ツールの結果に基づき算出）。今後も継続的に活用し、学びのPDCAサイクルの確立と学力向上に向けた取組を支援する。			

（成果）遠隔授業における各授業の評価は概ね高いといえるものだった。生徒の学力の定着・向上の状況は、CORE 事業初年度の令和3年から横ばい状態であり、目標数値に達していない。各授業の評価を測るにあたり、総合的な学力の指標となる学びの基礎診断の結果に結びつかなかった。しかしながら、CORE 事業ネットワーク構成校に目を向けると、特に小国高校の進路実績は、地方の小規模校でありながら目を見張る結果を残している。

（R3:国公立大学8名、私立大学7名（55） R4:国公立大学10名、私立大学14名（59） R5:国公立大学4名、私立大学3名、海外大学進学予定1名（35）※カッコ内の数字は各年度の3年生の生徒数）

（課題）令和4年度の報告書にも記載していることであるが、遠隔授業を本格実施することで、学びの基礎診断で学力の定着・向上を測ることができるものとそうでないものがあることが判明したが、その改善がまだできていない。国の指定が終了し、新たな取組を検討中であるが、特に遠隔授業については、何を用いて生徒の学力の定着・向上を測るべきであるか、また、教科の特性を考えた時に、一律の測定指標を用いていいのかどうかについても議論し、整理検討する必要がある。

(2) 地域課題の解決等の探究的な学びに関する科目等の数（総合的な探究の時間も含む）

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		0	5	7
実績値	0	2	5	7

（参考）上記のうち、学校設定科目の数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		0	1	2
実績値	0	1	1	2

（成果）目標値通り、地域課題の解決等の探究的な学びに関する授業数の実績値を上げることができた。総合的な探究の時間における各校の探究学習は、令和4年度から高校魅力化推進室が主導する「県立高校学びの祭典」を開催したことで、普通高校と専門学科を有する高校、総合学科を有する高校が一堂に会することで、これまでお互いを知る事のなかった研究内容や手法、プレゼンテーション等を学び合うことができるようになった。このことで、それぞれの高校が、他校の研究のレベルを把握できるようになり、探究学習のテーマ自体が以前よりも深く、時間をかけなければ最適解が得られないような内容に改善されている。

（課題）総合的な探究の時間のテーマ設定が学校や学年で決められている場合があり、生徒の主体性が反映されていないことも散見される。それぞれの学校の事情はあるかもしれないが、多くの学校が本来の探究学習の意味を理解し、生徒自身の興味関心から生まれる問いを探究できるようなカリキュラムへと推移していく必要がある。

(3) 免許外教科担任制度の活用件数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		0	0	0
実績値	0	0	0	0
構成校の数	該当なし			

(4) その他、管理機関が設定した成果目標

成果目標①：県立高校のコンソーシアムの設置校数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		7	10	20
実績値	4	8	8	13
目標設定の考え方	地方部の高校を中心にコンソーシアムの設置を進め、地域と協働した体制づくりを推進する。			

（成果）本県では県立高校50校（分校2校を含む）、併設する県立中学校及び特別支援学校全てに学校運営協議会を導入しており、CORE事業にかかる各校のコンソーシアムも学校運営協議会が兼ねている。今回目標値として定めたコンソーシアムの数は、それとは別に、共同で何らかの目的に沿った活動を行ったり、共通の目標に向かって資源を蓄える目的で結成される組織を想定した。本事業を含めて、文部科学省等の指定を受けて組織され

ているコンソーシアムの他、学校独自の研究目的で組織されたものを含めると13のコンソーシアムとなり、昨年度に比べると増えたものの、目標値を達成することはできなかった。

(課題) 学校自体にコンソーシアムがあまり認識されておらず、また、校内に組織を作りすぎると学校や関わる教員の負担が増えるというマイナスイメージがある。コンソーシアムを組織することで、外部からの意見や助言を受けることができ、各校における独自の研究等が質の高いものになることなど、プラスのイメージを持ってもらえるような周知の仕方を考えていく必要がある。

成果目標②：CIOによる成果発表会に参加した高校の数（管理機関等含む）

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		20	50	50
実績値	0	0	15	0
目標設定の考え方	各県立高校が成果発表会に参加することにより、遠隔授業への理解を深め、普及を図る。			

(成果) 今年度は、運営指導委員会の中でCIOによる成果発表を行ったが、CORE事業ネットワーク内での実施に止まった。

(課題) 次年度以降、遠隔授業を拡充していくにあたり、CIOの知見の普及は必須である。遠隔授業を導入する際、学校は日課や教育課程を共通化に相当な時間を要したため、授業担当者の経験の共有と併せて、年度早い段階で計画し、県全体への更なる周知を行い、将来的な遠隔授業の拡充に繋げる必要がある。

2. COREハイスクール・ネットワークとしての活動指標（アウトプット）

(1) COREネットワークの構成校における遠隔授業の実施科目数

	2年度	3年度	4年度	5年度
実績	0	0	5	7
見込み		0	5	16

(成果) 計画時には16科目としていたが、実施際には7科目の実施となった。令和4年度に実施していた地理Aが、配信校で必修科目となったため、令和5年度の遠隔授業での実施ができなくなったが、実技科目である「声楽」、地域課題解決（探究的な学び）科目である「グローバル・スタディーズ」、発展的な学びに関する科目である「発展英語」とそれぞれ生徒のニーズに対応するために、様々な科目を開講することができたことは評価できるものとする。

(課題) 令和5年度に実施した科目の遠隔授業における適不適について分析すると、「声楽」及び「グローバル・スタディーズ」の次年度の実施は難しいと考える。ネットワーク校及び開講科目の拡充を目標としているため、引き続き生徒のニーズを調査するとともに、必要な科目については学校の協力を仰ぎながら開講できるように取り組む必要がある。

(2) 地元自治体等の関係機関とコンソーシアムを構築している学校数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績	0	4	4	4
見込み		4	4	4

(成果) 計画当初から変わらず、構成校全てが地元自治体等の関係機関とコンソーシアムを構成している。

(課題) 例えば同じ事業を数年間行うとしても、学校や管理機関は年度ごとに事業の振り返りを行い、その時に必要な組織や人材をコンソーシアムに加える必要がある。

(3) その他、管理機関が設定した活動指標

活動指標①：コンソーシアム委員会の1校当たりの年間開催回数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績	0	2	2	3
見込み		4	5	5
活動指標 の考え方	概ね2ヶ月に1回の開催を目指す。			

(成果) 各校のコンソーシアム委員会の1校当たり前の年間開催回数は3回であった。

(課題) 前述のとおり、現段階では学校運営協議会がコンソーシアム委員会を兼ねているため、学校行事等を考慮すると今年度の回数あたりが妥当であると思われる。別途コンソーシアムを組織するならば、学校全体の組織の見直しが必要である。

活動指標②：CIOによる遠隔授業研修会を受講した高校の数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績	0	0	0	0
見込み		50	50	50
活動指標 の考え方	各県立高校が研修会に参加することにより、遠隔授業への理解を深め、普及を図る。			

(成果) 令和5年度も実施するまでに至らなかった。

(課題) 次年度以降、成果発表会や研修については、年度当初の早い段階で計画し、校長会や副校長・教頭会等の場面で、遠隔授業に特化したスケジュールを打ち出す必要がある。

7. 次年度以降の課題及び改善点

遠隔授業、地域協働・コンソーシアム共に令和6年度からの自走の可否の検証をテーマに令和5年度の事業に取り組んできたが、それぞれについて、以下のとおりまとめた。

【遠隔授業について】

小規模校における生徒の多様な進路への対応については、普通科目、実技を伴う科目、探究的な学びの性格を持つ科目、進学者向け科目等様々な科目を配信したことで、進学実績の向上だけではなく、地域から遠隔授業を学校の魅力の一つとして継続する声が上がっていった。また、STに協力を得ることで、受信校の教師の教え方や資質の向上にも繋がった。今後、開講科目を拡充する際に、STに配信する授業の授業者を担ってもらうことは、日課の共通化における関係校の負担軽減や、受信校側の立会い者の学びの場の創出という面からも、積極的に検討していく。

実施科目については、実技を伴う科目については見取りをはじめ多くの課題が残ったため、どのように改善すべきかについて更に整理が必要である。引き続き、いくつかの実技を伴う科目を開講し、遠隔授業でも効果的に実施できる科目についての研究についても検討する。

県全体に遠隔授業を普及させるには、教員の負担を軽減するためにコーディネーターの配置や研修の充実及び予算の確保が必要であり、完全な自走に向けて今後も取り組んでいく。

【地域協働・コンソーシアムについて】

高校教育指導班としては遠隔授業を中心に取り組んできたが、「くまモンプロジェクト」の実施により、コンソーシアムを活用したそれぞれの学校における探究活動を教育委員会としても深く関わることができた。アンケート結果から生徒や地域の大人には変容が見て取れ、一定の成果があったと思われる。組織的には、学校の魅力化に取り組む「高校魅力化推進室」との繋がりも強くなり、委員会内では、1班1室が高校魅力化の両輪となった推進ができた。

各校におけるコンソーシアムは学校運営協議会を兼ねているのが現状であり、地域課題解決を推進するためには、地域外の外部有識者を加える必要があると感じた。県としては運営指導委員を委嘱しているが、定期的な指導・助言仰ぐために、教育委員会が各コンソーシアムの構築にもう少し積極的に関わり、多様な委員構成が可能となるように、予算を確保する必要性を強く感じた。

次年度以降は、地域協働・コンソーシアム部分については、高校魅力化推進室と更に連携し、生徒が社会に関わっていく意識や自校の魅力化を発信できる力等を育成できる場となるように研究を継続し、各学校と教育委員会で、どのような学びを生徒にさせていくかについて協議する場を設ける必要がある。